第７日

令和５年12月７日（木）

午後２時10分再開

○議長（小島清人君）　休憩前に引き続き会議を開き、一般質問を続行いたします。

次に、12番中島秀樹議員の質問を許可します。12番中島秀樹議員。

（12番中島秀樹君登壇）

○12番（中島秀樹君）　皆様、こんにちは。質問の許可を得ました12番中島秀樹でございます。お昼からでお疲れと思いますけども、しばし御辛抱いただいてお付き合いいただきたいと思っております。

今回は、前々回からの積み残しのシティプロモーションについてを、主に協議といいますか、議論していきたいというふうに考えております。

昨日、シティプロモーションは、やっぱり分かんないよねと思って、ぐずぐずいろいろ資料を調べておりまして、集中できないからか、パソコンでいろんな画像といいますか、過去のニュースなんかを見ておりました。そうしたらば、報道番組で池上彰さんのがありまして、それでこんなことを言っていたんですね。今、ニュースとかで、ある某局なんかは、「ここからはＡＩアナウンサーが読みます」とか言って、ＡＩが読むというのがあるんですけれども、ＡＩアナウンサーは、噛まないし間違えない、スラスラと読む。だけども、ＡＩが読む原稿というのは頭に入らないんだよねと、そんなことを言っておりました。

あるアナウンサーが、上手にスラスラと読んでいるんだけれども、池上さんから見ると、この人は分かってなくて、字だけを追って読んでいるというのが分かるそうです。「あなた、理解してなくて読んでたでしょう」って、そのアナウンサーに言ったら、「分かりましたか」というふうに答えたという話があるんですね。

これは私、議場とか議会の中でも、時々感じるときがあります。この人、分かんないで読んでいるよねって思うときがあります。噛む、間違える、だけれども伝えたいという気持ちが伝わってくる。私の前に何人も同僚議員が一般質問をいたしましたけど、よく、やっぱり気持ちが、この人はこれが伝えたいんだなというのが伝わってまいりました。私も今日、登壇をしまして、自分の意見を言いたいと思いますが、負けないように頑張りたいと思っております。難しくて十分には理解できていないんですけれども、シティプロモーションについて議論を交わしていきたいと思います。

残りは、質問席より続けます。

（12番中島秀樹君降壇）

○議長（小島清人君）　12番中島秀樹議員。

○12番（中島秀樹君）　では、通告のとおりに行きます。シティプロモーションが１番目で、２番目が被災体験を活かすということでやっていきたいと思っております。

まず、シティプロモーションは非常に難しくて、本を何冊か読みまして、ジュンク堂と

か、それから久留米の紀伊國屋とか行きましたけれども、シティプロモーションの本は、あまりありません。２冊読んだんですけども、河井孝仁さんの「シティプロモーションでまちを変える」とか、「シティプロモーション2.0」と、この本が非常にいい本だなと、読んで――ただし難しいです。何回か読んで、やっと理解できたくらいですけども、この本に書いてあるようなことを、ちょっと受け売り的なところがあって、出典というのはきちっとしておかないといけませんので、本に書いてあることを自分の意見みたいにして言うのっていうのは、ちょっといけませんので、ここにたくさん影響されているということは、前もって申し上げておきます。

「シティプロモーションでまちを変える」という河井孝仁さんの本ですね。まずお尋ねします。担当の佐々木課長、これって読まれていますか。

○議長（小島清人君）　シティプロモーション課長。

○シティプロモーション課長（佐々木陽子君）　はい。拝読させていただいております。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　さすがです。本当に難しい本ですけれども、やっぱり担当課では読んでおかないといけない本なのかなと思います。

私も、最初、シティプロモーション課というのができたときに、ああ、知っている知っていると、シティプロモーション、市役所がやっている朝倉市の宣伝だよねと、朝倉市の知名度を上げるとか、消滅可能性都市とか言われたこともあるし、人口を増やすためにやるんだよねと、観光客も増えたらいいよねと、まあ市役所が中心になってやることで市民にはあんまり関係ない話だよねと、そういうふうに理解しておりました。

でも、シティプロモーションというのは、そういったものではありません。宣伝とかＰＲとか、そういったものではありません。シティプロモーションとは何かと、まず定義から入りたいと思うんですが、シティプロモーションの定義とは、どのように捉えていらっしゃいますでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君）　企画振興部長。

○企画振興部長（三浦弘己君）　シティプロモーションの定義というところでございます。

シティプロモーションの定義につきましては、先ほど議員がおっしゃいましたように、ＰＲとかそういったものと思われがちでございますけれども、市としては、シティプロモーションは、地域の魅力を創出しまして、市内、それから市外に、その魅力を発信することによりまして、市のイメージを高め、それによりまして、人材、それから物財、それから資金、情報などの資源を呼び込みまして、最終的には、地域の活性化、それから地域経済の活性化につなげるといったような活動のことであるというふうに、市では考えておるところでございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　私と大体一緒です。繰り返しになるんですけれども、地域を持続

的に発展させるために、地域の魅力を地域内外に効果的に訴求し、それにより、人材、物財、資金、情報などの資源を地域内部で活用可能としていくことと。要するに、リソースを地域内部で活用していくことだということになります。

この河井先生の本によりますと、「一言で言うならば」ということで書いてあるんですが、まちに真剣、マジになる人を増やす仕組みだと。いかにマジに朝倉市のことを考えて、マジになる人間を増やす仕組みが「シティプロモーション」と言われています。

朝倉市の人がただ増えるだけじゃない。朝倉市って何とかの税金が安いとか、何とかが無料だから朝倉市に住むのがいいよねって、そういう方も多分、市民の中にはいらっしゃると思うんですけれども、やっぱり朝倉市が好きだとか、朝倉市に愛着があるとか、要するに、数じゃなくて朝倉市への思いを持った人、これを増やすのがシティプロモーションになります。

これから人口が、日本は減っていきます。私、昨日、ニュースで皆さんも御覧になったと思うんですけれども、今、福岡市の人口が164万4,000人、これは５月20日時点ですけれども、これがピークが2040年で170万2,000人、170万人になるというニュースが、昨日、流れていたと思います。私は2040年、あともう20年もないと。20年もない中で、この20年間、朝倉市がこのチャンスを生かさないと、福岡市ですら人口が減っていく。そうしたら朝倉市も間違いなく人口が減っていく。朝倉市は地の利があります。福岡市のそばにあるという地の利がある。だけれども、この流れは2040年までに、僕はつかまないといけないと思っております。

日本全体の人口は、2050年代には――あと30年ぐらいですね、あと30年ぐらいには、今１億2,500万人ぐらいいる人口が１億人を切ると言われています。人口を何とか増やして、人口を維持して、できたら増やす、そうありたい。福岡市のそばにあるから朝倉市はそのチャンスがある。そのチャンスはつかみたい。だけれども、ひょっとしたらできないかもしれない。そしたら、朝倉市って、やっぱり下山の思想といいますか、日本全体が減っていくんだから、やはり減っていく人口で何とかしていくというこの発想も大事なのかなと。じゃあ、人が減ったんだったら、数が増やせないんだったら、やっぱり朝倉市にマジになってくれる人、思いを持ってもらう人を増やすしかないんじゃないかと、私はそのように思っております。

市民が参画する主権者となって、市民が町の魅力を発信するものとなって、市民の力によって地域に必要な資源を獲得する。今までは、行政がこれをやってください、あれをやってくださいというふうにいろいろ言われたと思いますけれども、いろんな、世の中が複雑化している、ましてや人口が減っていっている、そういった中で、私は行政だけでやっていくというのは無理だと思うんです。「協働」という言葉が、少し前に議会の中でもたくさん出ましたけれども、協働でやっていかないと、私はこれからは、行政も市民も立ち行かなくなっていくと思います。

市の皆様は、市の職員の皆様は、専門性を持った、一定の予算を持った市民の代理者です。市民が主権で、その代理者となって、市民と一緒に、私もそうなんですけれども、朝倉市をいいものにしていく、魅力あるものにしていく、そういったことをやっていくのが、私はシティプロモーションだと思っております。

すみません、私ちょっと語り過ぎましたけれども、では、私の今考えを述べましたけれども、なぜシティプロモーションをするというふうに、職員の皆さん、執行部の皆さんは、お考えでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君）　企画振興部長。

○企画振興部長（三浦弘己君）　なぜシティプロモーションが必要なのかということでございます。

先ほど議員も申されましたが、今、少子高齢化、それから人口減少と、全国的にも課題がございます。そういった中でも、地域の持続的な発展と、それから、まちの活気というものを維持、向上させていかなければなりません。そういった意味でも、シティプロモーションが必要であるというふうに考えておるところでございます。

本市は、度重なる災害に見舞われておりまして、全国的な報道等によりまして、認知度といったものが上がっているという部分ももちろんございますけれども、しっかりと本市の魅力、それから強みを発信して、一人でも多く朝倉のよさに共感してもらえるような人を増やしていきたいというふうに思っています。

また、将来的に地域を支えていただく、また、継続して発展させていただく、先ほども申されたような担い手といった方の増加が必要かなと思っています。市民自らが、まちをよく知るということによって、市民の誇り、それから愛着を醸成しまして、市外からも応援してくれる人を増やすと。その応援してくれる市外の方と市民と共に、地域を元気にしていくことの熱意を高めることが大変必要だなというふうに思っています。そこにシティプロモーションの意義があるというふうに考えておるところでございます。以上でございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　今、朝倉市の認知度が全国的に報道されて上がったみたいなことでしたかね、ありましたけども、朝倉市の認知度って、どうしてもやはり災害の部分で認知が高まったという部分は、残念ながらあるのかなと。私は、これを逆手に取って、災害に関しては、朝倉市はフロントランナーなんだと。災害のことは朝倉市に聞いてくれと、そういうふうな存在であるべきと。これは２番目の項目で言おうと思っているんですけれども。

ただ、朝倉市の認知度って、どうしてもそういった災害のイメージがついて回るのかなというふうに思っております。朝倉市の認知度が上がったと言いますけども、すみません、私、必ず言ったことに関してリターンを返しますので、どういった部分で上がったという

ふうに、三浦部長はお考えでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君）　企画振興部長。

○企画振興部長（三浦弘己君）　やはり、災害が大きかったということで、新聞報道等で多く報道されました。それによりまして、多くのボランティアの方が来られたとか、多くの方が、ふるさと納税をしていただいたとか、災害に特化した寄附等をしていただいたとか、そういったこともございましたので、そういった点では、認知度が上がったというふうに思っているところでございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　私は、災い転じて福となす、必ず朝倉市は災害のことについては――防災の都市なんだと。すみません、ちょっと話が次のあれになっちゃうんですけども、今回、令和５年に平成29年と同じぐらいの雨量が降ったけれども人的被害は全くなかった。これは、前回、ちゃんときちっとハード面とかソフト面とかで手当をしていたからそういうことが起きなかったんだ。だから、やればちゃんとできるんだというような、こういったことを発信するような、そんな市であるべきだって私は思っています。だから、災害も必ずプラスのイメージに変えられると、私は思っております。

そういった中で、すみません、脱線しました。個々の住民が主権者となって、市の職員の皆さんが市民の代理者となって、主権者たる住民の皆さんが、どんなまちをつくるのかが望ましいかを自ら考えて、その実現のため、行動を一部の市の職員の皆さんに託す。朝倉市ってこんなふうになってほしいんだから、だから、市の職員の皆さん、こういうふうにしてくださいよと、そういうふうになるような状況をつくる、これが私、シティプロモーションだと思うんですよね。

そしたら、市民の皆さんも、私って市の中で存在感があるんだと、朝倉市のために役に立つんだと、そういった存在になれば、自分たちがつくり上げた朝倉市の魅力、そういったのを多くの人に語りたくなるんじゃないかなと。私が目指すあるべき姿、シティプロモーションのあるべき姿というのは、これです。まだ残念ながら、そこまでは多分行っていないと思いますけど、そうなったらいいなと思っております。

では、シティプロモーションは市民にとって必要なんでしょうか。私は、さっき言ったように必要だと思っているんです。市民にとって、なぜ必要かと言ったら、まちに関わっている自分たちは当事者なんだと、だから自分がまちにとって意味ある存在であるというふうに思っていただく、これのために、私は市民にとってシティプロモーションは必要だと思っていますが、執行部の皆さんは、シティプロモーションは市民にとって必要だと思われますでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君）　企画振興部長。

○企画振興部長（三浦弘己君）　お答えいたします。

地域をよくしよう――市民自らがですね――という思いの熱量というのは、大変必要で

あるというふうに思っています。市では、あらゆる手段で市内外に情報を発信することで、いつまでも住み続けたいとか、市外からすれば訪れてみたい、市外の方からしたら住んでみたいというのを思ってもらって、地域の活力を高めていくということが目的でございますので、そういったものでは、市民の誇りといいますか、そういった愛着度といったものは必要であるというふうに思っているところでございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　すみません、私、気持ちだけが先走ってしまいまして。一応、今まではですね、なぜシティプロモーションが必要なのかという、なぜの部分を語ったつもりです。

じゃあ今度、具体的に、なぜ必要なのか、そして次に来るのは何をという部分が必ず来ると思うんですけども、執行部の皆さんは何をプロモーションしようと思っていますか、いろんなやり方あると思いますけど。まず対象をですね、何をプロモーションしようというふうに思っているのか、それをお尋ねしたいと思います。

○議長（小島清人君）　企画振興部長。

○企画振興部長（三浦弘己君）　何をプロモーションするのかという質問でございます。

シティプロモーションといいますのは、単に観光客を誘致した交流人口の獲得とか、移住促進によります定住人口の増加を目指すだけではないというふうに考えておるところでございます。

多様な地域の魅力を市外に効果的にアピールすること、それから、市内で生活している住民の方に対しましても、地域の魅力、それから朝倉市での暮らしのよさ、そういったものをアピールすることで、先ほども申しましたけども、誇りや、それから愛着というのを醸成しながら、地域を推奨する意欲の向上を図ることが重要であると考えております。

さらに、効果を高めるためには、住民と市内事業者、それから市が一体となりまして、根気強く魅力創造のサイクルを続けていく必要があるというふうに考えております。

そういったことを踏まえまして、まずは、地域の強み、それから多彩な魅力を発見し、共有しながら、ライフスタイル、それから滞在スタイルの優位性を明確にして、様々な魅力を組み合わせて、アウトプット、いわゆる情報発信をしていくこととしております。

そのためには、統一したコンセプトが必要であるというふうに考えております。先ほど申しましたように、コンセプトでございますけども、以前に御質問をいただいたときに、何を売りにするのかというお話がございました。魅力はたくさんございましたけども、中でも、やはり水であろうという回答をさせていただいたというところでございます。

やはり朝倉市には、きれいな水がたくさんあります。そのことが豊かな恵みをもたらして、暮らしに潤いをもたらしている、そういったことを強みとして発信し、共感してくれる人を増やしていきたいというふうに考えています。

また、市では、現在、ブランドメッセージといたしまして、そういった水のＰＲとしま

して、「水もしたたるいいところ朝倉」というところ、それとそのロゴマークというのをデザインしております。これは福岡都市圏の重要な水資源地域であること、それと、水と共に発展してきました本市の歴史、それから豊富な農作物、市の誇りである川と、生活に根づいている水というのを印象づけるために作成をしているというものでございます。

こういったアイテムを活用しながら、市の認知度を高める取組を進めていきたいというふうに考えているところでございます。以上でございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　何をということで、一つのブランドメッセージとして水という言葉が出ましたので、私も水、いいなと思いますので、それで通していただきたいと思っております。朝倉市、水が豊富だ。

ただですね、皆さん家でテレビ見ていらっしゃると思うんですけれども、ＣＭってＣＭを最初から見ようと思って見ている人はいないと思うんですね。やはりＣＭがずっと流れていたら、時々、「おっ」て思って、ちょっと注意が行くといいますか、そういうときってあると思うんですよね。その「おっ」と思わせることが、私、大事だと思うんですよね。朝倉市、水、確かに何かこう非常に王道で鉄板のような感じはするんですけど、おっと思わせるような、そういう仕組みといいますか、最初に、おっと思わせて、これプッシュメディアって言うんですけども、おっと思わせて、あの芸人面白いねとかって思わせて、そして後からインターネットで調べるとか、ＣＤ借りてみるとか、何かそのような、その「おっ」と思わせるような仕組みというのが、私、必要だと思うんですね。

そういう意味では、ちょっと水だけでは弱いのかなと思いますけども、ここら辺のところ、何かこう、もうちょっと何というんですか、プロモーションすることについて、おっと思わせるような部分が必要だと思いますが、どのようにお考えでしょうか。三浦部長、これちょっとすみません、事前になかったかもしれませんけど、もしありましたらお願いします。

○議長（小島清人君）　企画振興部長。

○企画振興部長（三浦弘己君）　気をとめやすいというようなことだと思いますが、先ほど言いました「水もしたたるいいところ 朝倉」というのは、最近つくったものでございまして、これは朝倉市をイメージするには大変有効なメッセージだというふうに、市としては思っているところでございます。

これをぜひ積極的に進めていきたいと思っていますし、ロゴマークもそういったものをイメージした、木と水といったものがおしゃれにできたものであるというふうに自負しておりますので、そこら辺は積極的に、それをＰＲしていきたいというふうに思っているところでございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　では、すみません。なぜやらないといけないのか、何を対象にし

てやるのかとなったら、今度はどのようにというふうに、普通考えていくときの流れでいきますけど、じゃあどんなふうにプロモーションをしていくのかというのをお尋ねします。

私、今さっきプッシュメディアとか言って、メディアを戦略的に使うというのも大事でしょうけども、どんな手段を使ってプロモーションするかというのをお聞きしたいと思います。

○議長（小島清人君）　企画振興部長。

○企画振興部長（三浦弘己君）　シティプロモーションの進め方ということでございますけれども、シティプロモーションにつきましては、一方的にアピールをしたりとか、箱物を造ったりとかいうことで成功するというわけではないというふうに思っております。朝倉のファン、それから多様な地域の担い手というのを増やすことが必要ですので、そういった市民や市外の方で朝倉市にゆかりのある方とか、朝倉市に関心のある方、朝倉市に実際、住みたいと思っている方など、それぞれに合わせた効果的なプロモーションが必要であるというふうに考えているところでございます。

そのためには、地域の特性を生かした魅力を発信するというだけでなくて、目的に合った市の施策も実施する必要があるというふうに思っております。また、今では、朝倉お試し居住体験などといったものをいろいろしているところでございますけれども、他の自治体の事例等をそのまま真似るというわけではなくて、本市に必要な要素、それから目的を明確にしまして、地域の特性に合った戦略を考えながら、本市の将来像であります、「人、自然、歴史が織りなす　水ひかる　朝倉」の実現を目指してまいりたいと思っております。

そのために現在、先ほどもちょっと申したんですけども、市役所内の各所管で進める事業について、シティプロモーションの視点を入れることが必要であると、各施策にですね――と思っています。そういった職員意識の改革、それとか人材育成、そういったところに取り組んでいかなければならないというふうに思っているところでございます。

行政内部の連携を図るための、そういった体制としまして、シティプロモーション戦略会議というのを設置しているところでございますけれども、そういった所管の業務の垣根を越えて、魅力ある取組を企画、提案するといった、全庁横断的に推進をしていくところでございます。

また、ＳＮＳの活用についても、職員から参画希望者を募って、プロジェクトチームをつくって、効果的な活用方法について調査研究をしているところでございます。以上でございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　そうしましたら、今部長のお言葉の中から、市役所の内部の職員間のというような言葉がございましたけど、そしたら、ちょっと聞いてみたいなと思いましたのが、職員の間で朝倉市のよさとか強みって共有できているのかなというのを疑問視しているんですけれども。

例えば、あなた、朝倉市の職員の皆さんに、朝倉市の魅力を幾つ挙げられますかと、ああ、これ職員の皆さんって言ったらいけないな、市民の皆さんにですね、住民の皆さんに、「まちの魅力を幾つ挙げられますか」というアンケートを取ったとします。それと、今度は別のアンケートで、「まちをよくするために活動したいですか」というアンケート、ＡアンケートとＢアンケートを取ったら、まちの魅力をたくさん挙げられる人は、まちのために活動したいというような、相関関係があるという、そういったデータがあるそうです。

要するに、まちの魅力をたくさん知っている人は、そのまちのために活動したい、役に立ちたいと思う。だから逆を言うと、まちのことはよく分からない、ただ住んでいるだけとかですね、これも語弊があるかもしれませんけれども、例えば、一時的に転勤で３か月だけ住むとか、そういう人は、多分、まちには全然関心がないでしょう、どうせ引っ越すんだからみたいな感じになると思いますけど、まちの魅力を幾つ挙げられるかが、たくさんまちの魅力を知っているということが、まちのために貢献するということに結びつくというデータがあります。

じゃあ、朝倉市のよさ、強みというのは、部長は何だと思いますか。そして、それが市の職員の間で共有されていると思いますか、お尋ねします。

○議長（小島清人君）　企画振興部長。

○企画振興部長（三浦弘己君）　まず、朝倉の強みというところでございますが、やはり福岡都市圏とかから近いということで、かつ自然が多いということで、食べ物もおいしいと、ゆっくり過ごせるといったところが、やはり大きな強みであるというふうには思っておるところでございます。

ただ、議員言わっしゃるように、職員間でそれが共有できているかといったところについては、まだまだ弱いところ、部分があるというふうに感じているところでございます。

そういったところも含めまして、今、戦略会議の中で、いかにすれば職員間でそういった情報を共有できるようになるかと、それをまず施策につなげていくことができるかといったところを一生懸命議論をしているところでございます。以上でございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　私、以前、朝倉市の売りは何かというようなことも聞いたことがあるんですけど、部長のほうからも、そういった言葉をいただきましたけれども、朝倉市はこれがいいよねというような優位性といいますか、そういったものが、朝倉市ってこれがいいんだということを、市の職員であったりとか、市民の皆さんも、これ共通して持って、これやはりシンプルで分かりやすいものがいいと思うんです。これ難しいと思います。これはプロの力を借りないとできないかもしれませんけども、こういったものを、一応、優位性を形にして、それで市民の皆さん、職員の皆さんに行動を変えていただく。朝倉市はいいんだ、朝倉市のために尽くすんだというふうに行動を変えてもらう。そしたら市民の皆さんが、やっぱり朝倉市は自分たちがやっていることは間違っていないんだ、もっと

もっと朝倉市のほうにやろうと、こういったいい流れというか、こういったものをつくっていただきたいというふうに思います。

ですから、私は朝倉市のよさって人だと思っているんです。朝倉市の人は本当にいい人が多いと思うんですけども、でも、それをどうやって一言で表したらいいのかなというのは、まだ答えが出ていないんですけど、朝倉のよさは人にありというふうに私は思っております。何かいいアイデアがあったら、また言葉にしたいというふうに思っております。

そしたら次に、私は、シティプロモーションで市民の方にやってもらう、朝倉に誇りを持ってもらう、朝倉のために努めてもらう、朝倉のために尽力してもらう、それから朝倉を好きになって、いいところをいっぱい知ってもらう、こういったことが必要だと思うんですけれども、それには、「シビックプライド」という言葉がございまして、これがないと朝倉市のシティプロモーションは成功しないというふうに、私は考えております。

まず、「シビックプライド」というのは、以前も私ちょっと言ったことがありますけれども、どのように担当課のほうで定義してあるかお尋ねします。

○議長（小島清人君）　企画振興部長。

○企画振興部長（三浦弘己君）　「シビックプライド」の定義ということでございますが、市としましては、地域に対する市民の誇りと愛着と、先ほども申し上げたところですけれども、そういったことであると認識をしているところでございます。

特定の地域を愛して、その地域をよりよくするために、積極的、また、あるいは能動的に地域とつながって貢献するような行動をしようとする意識ということであるというふうに思っていますし、シティプロモーションのためには、大変重要な概念の一つであるというふうに思っているところでございます。以上でございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　シティプロモーション、何度も言いますけれども、市民にマジになってもらう仕組みをつくる、これがシティプロモーションです。マジになってもらうんです。

この「シビックプライド」というのは、今部長がおっしゃいましたけども、私が調べたのは、市民として主体的に活動し、地域をよりよくしていこうとする市民性。大事なのは、市民として主体的に、主体的に活動する、そして、地域をよりよくしていこうとする市民性、この「主体的に」という部分が大事だと私は思うんですね。シティプロモーションによって市民のほうに訴えかけて、シティプロモーション課のほうで訴えかけて、朝倉市のよさを分かってもらって、朝倉市のためにマジになってもらう、こういう人を増やしていく、これが私は大事だというふうに考えております。

そうしたら、シティプロモーションですね、今度、していくに当たって、目標ってやっぱり大事だと思うんですよね。ただ、やりなさいとか、それでは、なかなか物事って、やはり目標を決めたほうが人々の力も集めやすいですし、ベクトルも同じ方向を向くと思う

んですね。何を目標となさいますか。それとか、ベクトルを向かわせたりとか、目標を立てるんだったらば、数値が入っていたほうが分かりやすいのかなと思っているんですが、何を目標としますでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君）　企画振興部長。

○企画振興部長（三浦弘己君）　シティプロモーションの目標というところでございます。

目標としましては、地域に主体的に関わる人が増えると、行動するという、そういった方が行動することによりまして、まちの全体の魅力と価値が高まって、結果として移住とか定住とか、そういったことにもつながって、まちの活力が維持されるということが最終目標であるというふうに思っているところでございます。

数値目標ということでございますけれども、地域の認知度とか、それから地域を推奨する意欲とか、そういったものは大変、目に見えづらいということがございまして、数値化をするのは大変難しいというふうに思っているところでございます。

ただ、各部署で実施する事業の成果を測る際に、事業実施前と事業実施後に意識の変化を調べるといった調査でありますとか、市民アンケートを測ることで定量化することはできるのではないかというふうに、今考えているところでございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　数値化は非常に難しいと思うんですけれども、先ほど言いましたように、アンケートとかを取って、朝倉市が１から10までありまして、朝倉市が好きだという人と、あまり好きじゃないとかいう人の、それをポイント化してですね、何ポイント以上取るとか、そういったので測れるんじゃないかなと、その市民の思いといいますか、そういった部分で、何か私は数値目標を設けたほうがいいのではないかというふうに考えます。

そして、数値目標を設けまして、最終的には、やはり何かのゴールといいますか、そういったものが必要ではないかというふうに思うんです。こういうふうになったらいいなとかいうようなあるべき姿といいますか、最終的に、やっぱりゴールって必要だと思うんですけれども、そういったゴールというのは、どういったことをお考えでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君）　企画振興部長。

○企画振興部長（三浦弘己君）　先ほども申しましたけど、やはりゴールというのは、こういった人口減少が進む中でも、地域の活性化が落ちることがないといいますか、持続することが大変重要だというふうに思っております。

そのためにも、そういったことに関わっていただける人というのが重要であると思っておるところでございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　市民の皆さんが主権者となって、職員の皆さんは専門性があって

予算なんかの一定の資源を持っていらっしゃいますので、住民の持続的な幸せを実現するための代理人となると、そういうのが私のイメージであるんですけれども。

では、職員向けのですね、職員の皆さんが、やはりシティプロモーションというのを理解していないと、なかなかシティプロモーションというのは、うまく行かないというふうに考えますが、この職員向けのプロモーションというのは行われているのでしょうか、また、どのように計画していますでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君）　企画振興部長。

○企画振興部長（三浦弘己君）　職員向けのシティプロモーションということでございます。先ほども申しましたけど、シティプロモーション戦略会議というのを、現在、組織しているところでございます。これは、シティプロモーション課を事務局としまして、関係課を集めて、そこを主体として、事業の実施であるとか、そういった職員の意識改革とかいうことに、今取り組んでいるところでございます。

そういった中で、今後、職員のシティプロモーションに向けた考え方の方針といったものを、現在、作成しているところでございまして、こういった方向で職員みんなでシティプロモーションというものを意識しながら、それぞれの事業の中でそういったものを取り組んでくださいといったことをはじめとしまして、今、職員研修等も含めて計画をしているところでございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　そうしましたら、シティプロモーション課というのが今回できたわけなんですけれども、これは、なぜシティプロモーション課を立ち上げたんでしょうか。これは司令塔の役割なんですかね。どういった目的でシティプロモーション課を立ち上げたのかお尋ねします。

○議長（小島清人君）　企画振興部長。

○企画振興部長（三浦弘己君）　シティプロモーション課といいますのは、移住定住というのももちろんございますけれども、ここを中心に全庁的に取り組む、そういったところの、まず中心となるべきところというところを核としまして進めていくというところでつくったところでございます。以上でございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　全庁的にやるということで答弁ございました。

そしたらですね、すみません、施設の名前を控えてこなかったんですけれども、甘鉄のところに新しい施設ができましたですよね。すみません、名前何でしたっけ。ああ、コンネアサクラというのを、大変失礼いたしました、コンネアサクラをつくられたと思うんですが、あれって何でつくったのかが、今ひとつ私、見えないんですけども、これはどういった目的なんでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君）　シティプロモーション課長。

○シティプロモーション課長（佐々木陽子君）　コンネアサクラの設置した意図ということでございます。

コンネアサクラは、移住定住促進の拠点として、来年春のオープンを目指しまして、甘木駅前に整備を進めているものでございます。

ここでは、移住相談、それから空家相談をはじめとしまして、移住者や市民の交流を深めるためのシンボル的な場所となるような各種事業であったりイベントの実施を、現在検討を進めているところでございます。

プロモーションを進めていく上で、最も軸となるのは人だと思っております。コンネアサクラは、観光案内所のように、ここに行けば、朝倉のシティプロモーションのことが全て分かるというものではなく、むしろ拠点は、それぞれ朝倉の愛を持った「人」だと思っております。コンネアサクラでは、その人と人とが対面で、あるいはオンラインで交流しながら、つながりを深めて地域への強化の輪を深めていければと思っております。以上でございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　今のお話だとコンネアサクラは、どちらかというと、部外の方といいますか、市外の新しい方向けの施設と、朝倉市民の方が集うような、そういった場というふうに理解しましたけれども、それでよろしいでしょうか、再度お尋ねします。

○議長（小島清人君）　シティプロモーション課長。

○シティプロモーション課長（佐々木陽子君）　おっしゃるように、市外の方を相談受付する窓口でもありますし、例えば、市民の方を交えたワークショップ、また市民の方が、そういった市のことについて知ったり、市の情報を発信できるような、そういった仕組みを考えていきながら、イベントを開催したりというのを計画しているところでございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　よく分かりました。

そしたら、まあシティプロモーション課というのは、なかなかまだ市民にもなじみがなくて、どういう課なのかというのが、よく分からないんですけれども、分からないのが実情じゃないかと思われます。

しかし、そういう課を立ち上げましてやっていくというのが、今、覚悟もよく伝わりましたので、これシティプロモーション課をつくったというのは、どういった狙いがあるのか、市長のほうから、ちょっとお聞かせいただければと思っています。市長、どのようにお考えでしょうか。

○議長（小島清人君）　市長。

○市長（林　裕二君）　朝倉市が人口減少抑制、そしてまた、地方創生、朝倉創生をやっていくんだということで、今、取組を、ここ数年やってきております。その中で情報発信が弱いとか、いろんな御指摘をいただく中で、将来にわたって安定した人口構造を維持し

て、活力ある地域社会の実現のための地方創生を進める中で、庁内のそれぞれの部署でしっかりと取組を進めておりますが、地域の魅力向上や認知度の向上を意識した視点から、各部署との横の連携・調整を担い、それぞれの施策の効果を高め、成果を上げていくことを目的に設置をしたものでございます。

シティプロモーションは、特定の課だけで行うのではなく、それぞれの部署が主体となって全庁的に取り組むことが必要である。それぞれの施策を通じて、職員全員が意識して、まちの魅力を伝えることで、市内外にその思いが伝わり、シティプロモーションの効果を高めることにつながると期待をしているものでございます。

市民の、あるいは市内外の住民に、まず議員が本日冒頭で申されました、「マジになる人たちを増やしていく」と、そしていろんな形で活動をしていただくという大切さを言われまして、私もそのように、実は考えております。

そういったことを考えたときに、行政として、この部署だけで、シティプロモーション課だけでやるのではなくて、市職員が、やっぱり直接関わらない部にいる職員もおりますけれども、こういったことを、まず朝倉市では力を入れてやっていますよといったことを、まず職員全体に知ってもらうということは、極めて大切であるというふうに思いますので、まず、幹部職員ですね、部長、そして課長といったところにプロジェクトをつくって、今進めていますので、そういったことに、特に管理職に対して積極的にプロジェクト会議に職員に参加するようにというようなことを今求めているところでございますので、よろしくお願いいたします。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　まちにマジになる人を増やすというのは、この本の本当に受け売りなんですけれども、市長の今答弁で、市長の思いというのが伝わってまいりました。私は、もちろん市民の皆さんにマジになってもらいたいと思っていますので、上手な仕組みで戦略的にやっていただきたいと思っております。

ただ、主権者である市民の皆さんがマジになってもらうためには、代理者である職員の皆さんが、やはりマジになってもらわないと、私はそれは、熱が、思いが移らないんじゃないかと考えております。市長のほうから横断的にやっていくというようなお言葉も出ました。そういった意味では、やはり、俗に言う横串を通すとか、そういった動きが必要ではないかというふうに考えております。

そういう組織論的なことで言ったら、やはり副市長に頑張っていただかないといけないのかなと、市長が一生懸命やるというふうにおっしゃっていただきましたので、ベクトルは、もう決まりましたので、副市長がやっていただきたいと思っておりますが、仕組み的なことも考えまして、どういったことをお考えなのかお尋ねします。

○議長（小島清人君）　副市長。

○副市長（佐々木哲治君）　私にもプロモーションの関係で発言させていただく場を与え

ていただき、ありがとうございます。

まず、シティプロモーション――すみません、若干、私の考えも少し述べさせていただきたいと思います。シティプロモーション課には、これまでの商工観光課の観光業務とか、人事秘書課の広報の業務など、そういったものは集約させておりません。全く別の事業を考えるように指示しております。あくまでプラスアルファで「水もしたたるいいところ朝倉」をＰＲしていきたいということでございます。

また、大変残念なことに、７月に再び災害が発生しまして、若干足踏みしている感はございますけども、今年度、行政内部で先ほどから幾つか言っておりますが、シティプロモーション戦略会議というやつと、こども・子育て戦略会議と、２つ発足させて、第３次総合計画の成果を上げるべく活動しております。

先ほどから企画振興部長も答弁しておりますように、私もこういうふうに思っております。平成29年災害で大変お世話になった全国の方々に、今、朝倉市はこんな元気なまちになったと感謝を込めて発信するとともに、元気に復興した朝倉市には、このような特色があるんだといったところも知ってもらいたいと思っております。そのような朝倉市を好きになってもらいまして、ファンになってもらうと、その先に関係交流人口の増があり、その先の先だと思いますが、移住定住があるのではないかと考えております。

まずは、ＰＲが下手な団体から脱出しまして、「最近よく朝倉市って聞くよね」、「目にするよね」といったところからでいいかなというふうに思っております。いろいろ目標値とか目的値とか、かなり、これ時間がかかることでございますので、ターゲットとか目標をつかむのは難しいかと思いますが、ただ、もう走りながら、進めながら状況を把握して進めていきたいというふうに考えております。以上でございます。

○議長（小島清人君）　12番中島議員。

○12番（中島秀樹君）　今、副市長からございました、朝倉市、こんなに元気になりましたと、それを全国に見てもらう、これ何かいい言葉だなと思って気持ちが伝わってまいりました。市長も謙遜されて、朝倉市はＰＲが下手とか言われましたけど、私が冒頭で言いましたように、上手に言っても、やっぱり伝わらないことってあると思うんです。でも、噛んでもいいし間違ってもいいから、伝えたいというものがあれば、私はそれは必ず伝わって、人の心を打つというふうに思いました。今の副市長の言葉、それから市長の言葉、何かやっぱり気持ちがこもっているなというふうに感じました。

まちに対してマジになる人を増やす。朝倉市は、あと20年ぐらい、2040年に福岡市のピークが来ます。それまでにチャンスをつかまないと、あとは、やっぱりどうしても人口減少の波に飲まれていきますので、あと私は20年が勝負だと思っていますので、私も含めて職員の皆さん、市民の皆さん、マジになりたいと思います。そして、そのマジになる仕組み、シティプロモーションを、ぜひとも成功していただきたいと願いまして、私の一般質問を終わります。ありがとうございました。

○議長（小島清人君）　12番中島秀樹議員の質問は終わりました。

　暫時休憩いたします。２時20分に再開いたします。失礼いたしました。３時20分に再開いたします。

午後３時６分休憩